

四国遍路の歴史

四国は、1,000年以上前から巡礼の地となってきました。古代においては、四国はどこからでもアクセスが難しい、極めて辺境の地でした。そのため、文明から離れて知られている世界の端で厳しい条件の中で長時間を過ごすことで精神を鍛えようとした修行僧には、魅力的な場所となりました。

伝説によると、ここで初めて修行を行った僧の1人に、仏教の僧である空海（774–835）がいます。空海は四国出身で、真言宗の開祖です。9世紀に四国を巡ったと言われていました。空海は死後、「仏教の教えの偉大な師」を意味する弘法大師とも呼ばれるようになりました。そして空海の弟子も、師の足跡を追うようになりました。極めて信仰心の篤かった少人数の僧が行ったこれらの巡礼の最も初期の記録は、12世紀まで遡ります。空海に関連する場所に寺が建てられ、15世紀になるとその数は100を超えました。88ヶ所めぐりへの初めての言及もこの時代のもですが、どうしてこの数が選ばれたのかは完全に定かであるわけではありません。最もよくなされる説明は、仏教の教えによると、人間は88個の煩惱に苦しむと信じられているからというものです。

今日知られているような四国遍路が成立したのは、平和が続き文化や宗教の追求が花開いた江戸時代（1603–1867）のことです。1687年には、人生で20回以上も四国とその寺々を訪れた俗人の仏教説教師眞念が、巡礼者向けの四国の案内書を出版しました。『偏禮道指南』と題されたこの案内書は、初めて四国各地の88の寺をめぐるルートを解説したもので、それぞれの寺には番号が付され、巡礼者に役立つ案内情報が記載されています。眞念は、遍路の普及をライフワークにし、四国各地に約200もの石の標識を設置して、巡礼者が寺から次の寺に向かう際の道しるべとなりました。彼や彼と志を共有した僧の努力で、信仰心が試される88ヶ所めぐりが一般人の間でも知られるようになり、この巡礼は次第に誰でも行える旅になりました。

江戸時代にこの巡礼を行うには、まだ相当の決心と金銭的リソースが必要でしたが、救い、許し、それに人生の意味を探し求めたり、病や迫害からの解放を望んだ人々の間では巡礼の人气が高まり続けました。幕府の政策もその人气向上に一役買いました。江戸時代、一般の人々は一般的に居住地から離れることを許されなかったのですが、巡礼者には例外が認められたのです。国中の信仰心の篤い人々が巡礼に焦点を絞った宗教団体を結成し、リソースを共有し、1人または2人のメンバーがこの人生に一度の四国をめぐる旅に出られるようにしました。遍路の人气はその後数世紀の間で変動しました。社会不安や戦争の時期には人气がなくなったからです。しかし、その本質的な特徴は、17世紀からあまり変わっていません。『四國偏禮道指南』に載った寺のほとんどは、今でも88ヶ所に挙げられています。また、眞念の標識は、徒歩で巡礼をする場合でも、車で巡礼をする場合でも、電車で巡礼をする場合でも、今でも巡礼者の目印となっています。